

理系の人材はとにかく少ない。なぜ少ないのでしょうか？だいたい女子は数学が苦手などと思われているのはなぜでしょうか？少し実践的なところからいきますと、科学技術分野での男女共同参画がなぜ必要なのか？どうしたら女性科学者・技術者を増やせるのか？科学知識は客観的で中立的なのか？全く客観的で中立的なのであれば、女性も参画する必要があるということをそれほど言う必要もないのかもしれませんが、しかし、科学技術は決してジェンダーフリーであるとは言い切れません。そして研究には資金が必要です。本日新幹線のテロップを見ておりましたら、山中教授は国が自分の研究を支援してくれたことについてずいぶんとありがたく思っているとおっしゃったようです。それはお金を出す側が、山中教授の研究を非常に価値があると認めて資金を出しているわけですから、科学も価値フリーではないということです。そしてさらに説明するのに言葉が必要ということ

とジェンダーとの関係をお話します。

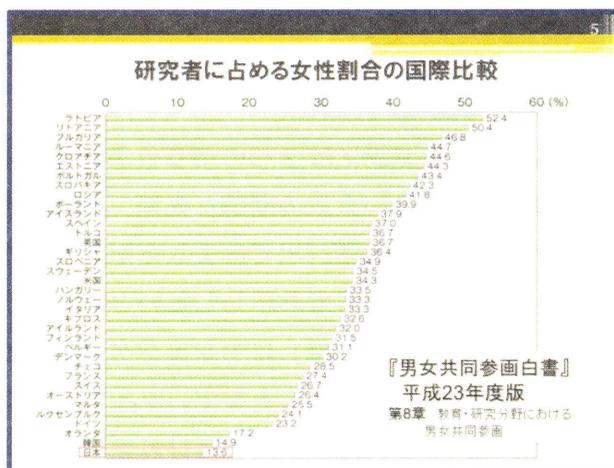
人材のジェンダー問題

- ・なぜ理系に女性が少ないのだろう？
能力の性差論は有効とは考えられない
性差よりも個人差に注目すべき
- ・科学技術分野での男女共同参画がなぜ必要か？
男女平等の理念、知識基盤社会、少子高齢社会
若者の理科離れ、多様性の尊重、研究者不足
- ・どうしたら女性科学者・技術者を増やせるか？
先入観、社会通念の変更、女子学生を増やす、
キャリア・パスの多様化、出産・育児期の支援

(スライド 4)

まずは人材のジェンダー問題から始めたいと思います。「なぜ理系に女性が少ないのか？」能力の性差論は有効とは考えられないと思っています。性差よりも個人差ですね。男子よりも断然物理が好きという女子もいます。男性であってもお料理が好き、もしくは編み物が好きで、うんと美味しいものや優れたデザインのものを作って、市場で注目される人もいますので、性差よりも個人差が重要だと考えています。「科学技術分野での男女共同参画がなぜ必要か？」ですが、少子高齢社会で、研究者が不足しているからです。例えば工学においても、製品のユーザーは男女なのですから、男性だけが設計や製作にあたるよりは男女がというように、男女平等の理念で職場としても門戸が開かれる男女共同参画が必要だと考えております。

そして「どうしたら女性科学者・技術者を増やせるか？」と言えば、やはり女子学生がまず

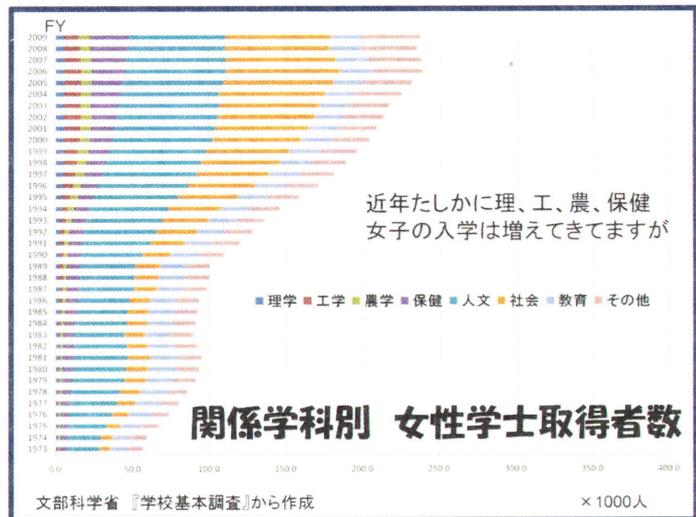


(スライド 5)

ずは増えなければいけないでしょう。そのためにはどうしたら良いかということですね。それからキャリアパスの多様化です。理系の女子の職業として3つくらいしか挙がらないというのではなく、もっと多様な形で社会はそうした人材を求めていることを女子中高生にも知らせるようにしなくてはならないと思います。また、出産・育児期の支援も、理系の仕事を継続するためには必要であろうと思います。

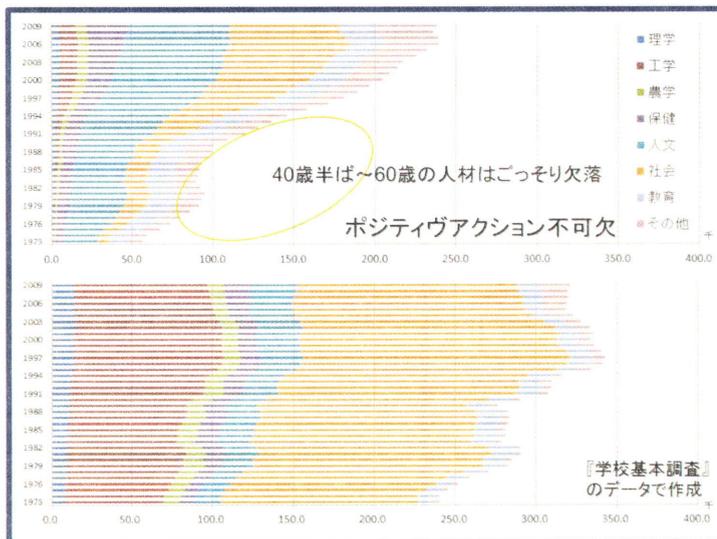
スライド 5 番 (前ページ) をご覧いただきますと「研究者に占める女性割合」で、日本は最下位に張り付いています。OECD 加盟国がベースになった統計で、EU の加盟国 27 か国と OECD の加盟国ですから、アジアからは韓国と日本が統計に出ています。数年前までは日本が上で韓国が下でした。あつという間に韓国に抜かれてしまい、ここ 2, 3 年差は開くばかりです。要するに「先進国」と言われる国の中で、日本の女性研究者の比率は 13.6% で最低です。これからのことを考えると、女性にもう少し頑張ってもらわないと、人材の不足を補っていくことができないだろうと思います。しかし、単純に女性比率が高ければ良いという訳でもありません。例えばラトビアやリトアニア、ブルガリアなどが上位にありますが、研究者そのもののお給料が安いとか、社会的地位がそれほど高くないなど、いろいろなことがありますので一概には言えません。それにしても日本のこの比率の低さは問題だと思えます。

次のスライドは 1973 年から 2009 年までの分野別・関係学科別の女子学士取得者の実数です



(スライド 6)

(×1000 人とありますので、100 は 10 万人のことです)。なんとといっても人文は多いです。そして社会 (法律や経済は少ないですが)、近頃はだいぶ増えているということがお分かりになると思います。ほとんどなきに等しい状況だったのが、理学、工学、農学です。特に、



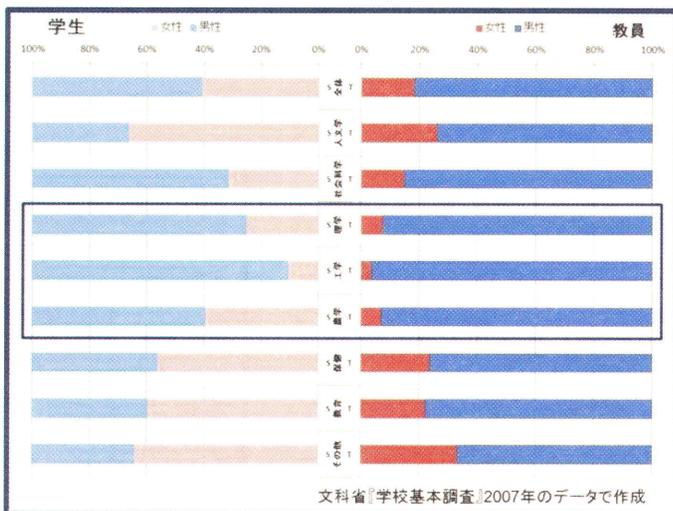
(スライド 7)

工学の赤い線があれば結構目立つはずですが、90 年代の前あたりは見えない。教育分野は比較的市場が変わることなく、常に一定の学生数を占めていることがお分かりになると思います。これは女子ですが、男女で比較したものが次のスライド 7 です。

男子の工学、社会 (法律や経済) は 1973 年の辺りでもあまり変わらない。日本社会が、いかに工学部卒の男性と法律・経済を学んだ

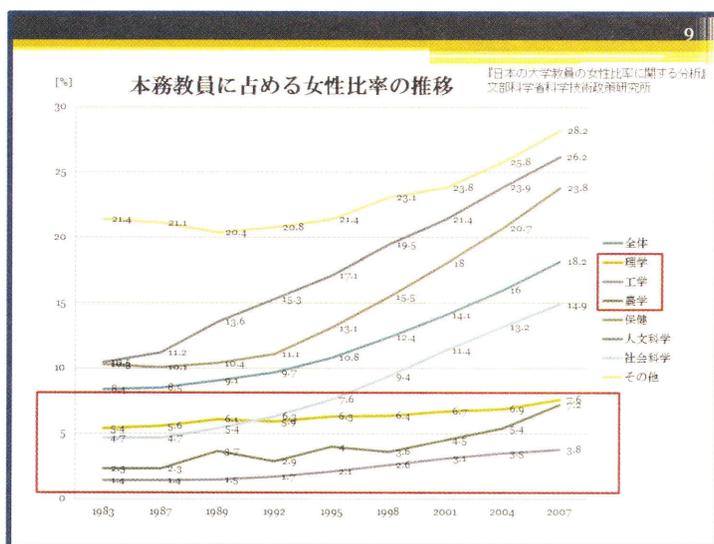
男性によって支えられてきたかが、よくお分かりになると思います。(三浦有紀子「科学技術分野における女子学生の動向、現状と今後」『科学技術社会論研究』第 7 号 2009 年 に

は、当該年度における卒業生数を 100 としたグラフを掲載し、この事実を明示する工夫がされており、スライド 6、7 のグラフは、それを参考し作成。) 法律・経済は女子も大分増えてはきておりますが、全体として見たとき、現在の年齢にして 40 歳半ばから 60 歳くらいの女性人材はごっそりいないのですね。2000 年になる手前のあたりの男子のグラフの先端と女子の先端部分で比べますと、進学率の差が効いてくるのです。実数は減っても、女子は進学率の伸びで、グラフは伸びているのです。後程、進学率のグラフもお見せします。楕円で囲んだ部分(前ページスライド 7)は、とにかく人材がいないわけですから、ある程度ポジティブアクションでもやらない限りは、ロールモデル不足で次世代が育っていかないのではないかと思います。



(スライド 8)

さて次のスライド 8 は、左側は学生の男女の比率で、右側は教員の男女の比率を示しています。真ん中の四角で囲んだ 3 分野の女性教員の比率はとても低いですね。農学、工学、理学です。女性教員が極端に少ない工学も問題ですが、学生がそもそも少ないのですから、そこから大学院に行って博士課程を出て、研究者になるのが少ないのはある種順当ではあるわけです。しかし、農学が問題で、これほど学部女子学生がいるのですから、いわゆる裾野は広がっているわけですが、教員になる女性は極めて少ない。工学は今の調子でやっていたらもっと裾野が増えるかもしれませんが、結局は農学と同じような形で学部卒の



(スライド 9)

学生を増やしていても、教員がそれほど伸びないという可能性がなきにしもあらずです。女性研究者をよほど意図的に支援して増やそうとしない限りは、増えていかないだろうという懸念は大いにあると思います。

今ご覧いただいたグラフは、2007 年のデータですが、次のグラフは女性研究者の比率を時系列で扱ったものです。

1983 年からスタートし、2000 年以降の他学部のグラフの伸びの良さに比べますと、工学は